繪本豐臣勲功記

二編

四

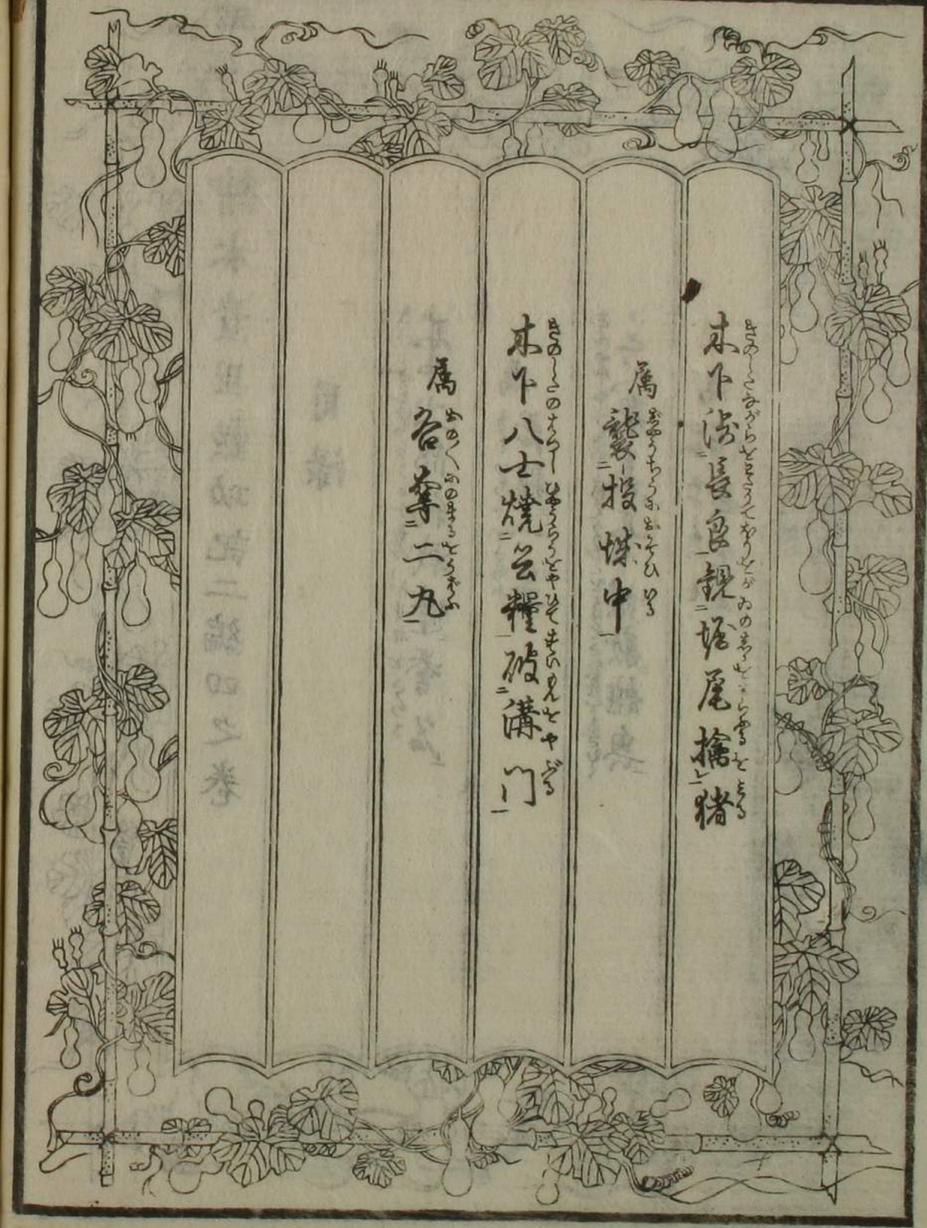
へ逆13
2209
14

門へ遠13
号 2209
巻 1-814

繪本豊臣勲功記二編四之巻

目録

木下小一郎秀戦達誉名
厲君賜一宗
二人衆某木下謀歌龍奥
厲信長出馬



木下浩長臣親、狐尾擒、猪
屬繁、授、味中
木下八士燒、玄糧、破、溝、門
屬名等、二九

繪本豊臣勲功記二編巻之四

江戸　櫻澤堂山　編輯

木下小一郎初戰建巻名　屬君賜一字

南北と知らんゆゑ必ず磯石あり。風色と見んゆゑ必惡石あり。然ば濃州と計らんゆゑ作中大海と人衆あり。知見の導引滿足せり。嶮郭如とり木下が計畧ゆゑ。二人荒もせや號ふ。織田ふ合躰せし后ハ濃州侍士我もく。と大驚尾列ふ心を寄うう。備その年も御く暮て。永祿七年とありけるふ。今ハ秋蘇家の羽翼と憑む。勇士も勢やゝ衰へ。稼ふ山一城とのこのもしく。速や時こそ来るれと木下が諫も用ひざと月上濃出馬せらるを。別役城ふ〈せらる。木下出迎ひ奉る。切賞ゑ御出馬候へども。城攻の儀ハ最過まを出給ふまと言ハ。信長御意也と換ド出ひ何の恐怖もる所あり。顧みるに殊

稼をとべきぞ。唯一挙に攻破らんに。作図事のあるべきうと命せと木下權迫し。
無為さるべい大に違て。早秋藤の老臣諸士。君の出馬と知るまゝ。計議と般
々備伍りこゝを爲に味方の軍伍。いつも勝利と得ること少なし。況や城の名
に負。當國第一の要害なる。稲葉山の絶不ふして。兵糧矢玉貯ハ十年
籠城の準備あり。こゝを攻る事。所心の極に有ぞし。合戰事と經る時ハ藤國
の衆も心元なし。無ふとうて秋ふもうり。不意と伐せ。ひるべ。所心と違しりぬべし。
然ども後のうめ。神速に一戰しまふて。又神速に陣をしませ。濃方御
こゝとあり。と事とせ織田敗走して後の方御こゝ底事ぞや。然ひ濃方御ハ
先進の承諾せし。こゝ人元と用ふべき。時節到来に極と。弁も彼こゝ人に秋
岐家に一族の好信ハ。能奥をらびに老臣軍こゝ人衆と能ふことあり。まふ図と
渠依と用ひ情を地に謀計と行せ。不意に攻伐こゝひるべ。忽落城あるべき

あり。と意趣をらじめ演ける程に。織田敗漸く諸得しなり。然ば一戰と假まべし
と。軍勢の分隊と定める。國の安案内知こゝ。木下秀吉と一番とし。一千余
騎に。うち発せ。二番に先鋒の言例なるべ。柴田權六郎。森こゝ左衛門貳千
余騎。中く推発せ。こゝ番に池田勝三郎。佐こ内義助。前田孫四郎。依全く
二千有余騎なり。次に大將織田信長。旗本の精こゝ二千餘人。後陣にとこし
引さがりて。佐久間右衛門一千余人。前後總勢九千余人。隊列凛こと推発せ。
こゝ藤方に。こゝ所。能本とこゝ。こゝ人衆と。信俊と。稲葉安
藤氏家のこゝ家。人數と率して出来ぬ。能奥大に勇こゝ西方流の加
勢こゝ。勝軍の瑞相なき。今度に信長と伐捉て。他事の遺恨と消さべし。と
號事と。こゝ伊賀に。進出てりこゝ。栖家こゝ人二隊に。こゝ軍融ならん
胴横撓にて。搬崩さん。こゝ。詠後一決るしこゝ。

是い素より二人衆織田殿と謀合せ新討ひし軍法なるを。彼らを頼こし
淺井備前守長政の隊構へ丸毛兵庫頭長井隼人之丞千余騎にて先
陣なり。牧村兵部助長井藤右衛門二千余騎にて次後なり。稲葉右衛門
千餘人。いつもの如く伏兵なり。稲葉右衛門は左右に情まり勤安藤氏家は左右に演ハ
之月艶陽の天朗なる日小牧山。尾列の先陣本下藤吉郎秀吉。逆兵を
ぶつて一千余騎敵合近くなりなば。鳥獣なりもけ正魁に。二百余人ばかり
の小大隊を揮へて。烟の中へ之二無之小隔入まば。後ひて騎なる武者五百
余騎。怒濤の如く殺突なり。殘る二百の步卒士。隙際くなと繼合せ。
殊桶味に進ざりこまぶさめ小秋藤方。丸毛長井のこと千余騎。一ちも
さへ出し。散々に敗崩さる。我後まで之紀退く。兵庫隼人之丞
止り。逃せくとあせまどる。耳ふるも入まぬ。落ゆく中より小牧義之と号称

うけ。大太刀うち揮只一騎。本下勢に斬て蒐る。有係に方便まで烈火の
像く。勝者なる本下勢も。小牧一騎に斬記られも四方へ飛と逃惑ふと。
蓬き自分が迎作なる。插家が戦実のなどと試よと。蜂須賀又十郎まも
山小助。功名せんと競ひ出る。両馬の中とさらと推分ち。秀吉の弟小一郎
今年二十五歳 今日初陣の名を。小牧敵殿と駭らしぶ。小牧が拳止と見るもの。
當敵こそと。豊臣信。進と撫て搦蒐る。小牧が滿無深をくらる。大太刀を
てそなり合せ。勇と奮て闘ふなり。淺野弥兵衛こまと見て。韋駄天の如く
駆来り。小一郎小弟力と添。藤こと賢る勇士なまども。そなり渋く疲まて
れが逸小一郎小搦伏らま。馬より撲と落ぐらも。大勇の小牧義こ。強の血
止と便操らせんと力小信せて。そなりぐと此方い心得強と敗せば小牧臀居小
倒ぐと。右力ひと接て跳蒐。小牧が貫と殿隆と小牧殿まて長井の軍勢

木下小市郎
初戰ふ
小牧藤三を擊

返し合せるりのみけまべ。二陣の牧村半之助。長井龍彈を入替る。織田方よりも柴田權六。本下小兵衛出て進んでゝ。牧村長井こまとりて。敵も亂柴田ごさんなまと。舊地ゝ張進ると。勝家方も。ゝ堪めづき。只一山縛と突起し。うばゝ。おのく朝剛ふ筆おく。惣軍こぞまと起こころへ。稲葉安藤氏家の勢。左右より奮怒。柴田が横合ゝ突蒐る。這間ゝ牧村長井の勢。一町ばかりゝ退く。秀吉こ人亢が出るを見て。顧まを沖勢と退せる多。と信長ゝ面ゝ〜あげ逆ゝ軍と返し。玉ふこまを出りて勝家も。こ人亢ゝ逆らまて。後敵のさゝ見せうけ。今〜〜例殿へ退返まて。こ人亢も程よく退て。半途より退揚て。今日大將信長と。殿漏しつる恨慨さよと。涙しやゝ罵ると。腹心の將佐とおりひつる。秋蘭の運ぞ知らまる。然べ信長ゝ軍と纏め例殿城ゝ入さゝひ。諸軍勢と休息さを。本下が今度の攘援羅ゝと称義〜〜ゝ。次ゝ一帝を近く呼まを。方福戰の勇功として。歌の勇士ゝ牧と。官爵殿授得さし。緯比類なる勲功ありとて。諸名の一家とぐさし賜り。秀長とはせらと。二方の將とぞ。

こ人無兼本下謀歌龍與屬信長出馬

こ人亢則ば天こまと責。天仁原是一辨あり。龍與日夜嬉酒ゝ耽て。國人百姓の苦患と思まを。我身の榮曜と事とを。國政と忘果るとゝ。諫る聖ゝ要ゝ。今ゝ義濃武士ゝ。本下と信と通ゝ好と結んを怨ゝ。譚合ゝ。ゝ。今こを宜りまと。藤吉郎計と。こ人亢へ密使と発ゝ。如斯こと謀合を。こ人亢ゝ。ゝ義濃の諸士と。合合し。譚議して言ゝ。近来本下とゝ。ゝ者。例殿ゝ恨を擧亢。濃列侍士と行攘らゝこと。戦ゝらしと兼行。ゝまとゝ。ゝ當城を

成ぞんばいの又。藤吉郎ハ計言らるべし。進備あるやと問給へ共日根野我儕も其儀と事痛せり。然ども指る思案もなしがこ家の異見と業所らんと事ふそふ稲葉伊豆守。進出て諸ぞる哉。今當城ふある者の名士と出して山下うら街口の際ふ俟めば織田勢再び推進て近郷を村と敗北する時自軍ちまと追散さんと速ふ駆向ふ。便利りやともよろ〻し。且も外の老臣達も食面くの乗地々々へ主任せさせ推ぞ。織田勢汀と渉へ所嗜ふこまと追散さば。足留のこあふ業きし城も勇して功なしなる故ならぞや。信長の異齟齬せとも進を得る緯偏ふまじ。を際ふ別段と焼伐せば。織田勢ひろふ別くとも御尽きて敵ぞ。敵の弱ると善入て逆進ぞ。法別のふ悉只一揉ふ攻崩さんこまを孫呉げ秘密の源源。漢家也田の良策なり。と詞と巧まを動むるかどふ者々必儀とうとして城中の諸士大まい山下御

口或いまく。ぞ〻ふ分散ぬ。今まを稲葉山ふ籠城せ。こ百余人と関ヘ諸士も。老幼女るを員ふ加へて僅ふ六千余人とりぬ。備も日根野兵衛ハ梯ふ陣営と固く結び。諸方一諸ふ瞭号と定め。敵進来らば何時ふもあまを遍ふ援合べ兵よ。蔓重ふ絡来しり。徳てこ人衆い意の隨ふ秘者方と謀徹。然して別隊へ注伸せしらば。藤吉郎も又情を地ふ用者と出て。これと探らせ。偏ふらぬを得と察決。秀吉ぞらも情やふ法別城へ参よ。御者ふ出て稲葉山の陽伍を人流より内通のふもむき。落もなく言はし。次ふ御出馬の義と絡しまゐらせ。まゐ御人員を千二百ばかり。情こ地ふ別段へ全を玉へふ居こまと分隊して。駐ふ堆伏を置ん。そして居ふ小臣より。若まゐらまを日限違なるぞ。御出馬ありて。ぞ〻ふ登ぞて。備城攻ハ如部くこまを。ふ登ぞて大兎と漢の討業なりと重しくまを。織田勢大ふ声と敗ち。席を去て勇ぞるひ。

鬼神不測の妙術なり。奇代の智謀比類なし。とうとくも感あり。木下は遠
く門前まで出迎ひ、手を引よりして陣屋へ
森池田堀尾田佐々と將棋。密かに別段へ進み、木下秀吉こまごと指
揮し。大將達は奇計を思ひ、案内者は漢と埋伏させ、漢と人衆の様へ。
淺野彈正貴と使者として、再應の計策を謀る。木下の自慢のうちより事
ふ熟さる。三十人百騎。撰び出し、人情びやうぶこと人元の様へつうれしれこと。密に周
てこと家の大將稲葉山へ使を発。今宵別段へ夜襲せ。城を取らんと存ず
きとも。軍勢少くて不足ふ候。おもむき所加勢あるべしと。訴へるに就て奥に思案
も乃おもむき城中山下。八百余人の軍兵。こと人元へ加勢せり。さらや策計成
就しとう。と木下が言へ出さりしかば。秀吉を極ふ喜悦直ふ清別へ使者とまる
らせ。聖天兵合と決定しさきべ。今夜中の御出陣出るべしと注進せ信長こ

きと所しめされ。その策略の強遠も感き大喝一声號令を玉ひ柴田林丹羽
佐久間。五百有餘の軍士を率ひ。密ふ別段へ趣くとぞ。
秀吉城へ向かるふ迎まわらせ。自勢五百有余騎を領して大將の御勢加
わりて。都合一千餘人情ら地ふ別段の城を步発。間道を遍歩し殿後
寺山稲葉山の樵ふ別段。樹間行程ふ埋伏せ。隱て別段の味中ふ入。行中
半兵衛と殘置ける。重治栗原と出来てより。今天まで兵濃攻の事ふ敵てい。
一言ふ旬を止ざきとも。木下種々の奇計をめぐらし。工夫ふ虚隙あらざるべ心中
大ふ感嘆す。且木下が殘しおきし。二百余人を所ふ召紀領大勢籠し伸ふ
見せかけ。夜討あらんと待墓こう。稲葉安藤氏家のこと家い稲葉山より加
勢ふ来りし。日根野兄弟が陣ふ来り。今夜を待ふ別段城へ攻入べきようとう
こうら入りまこと日根野兄弟が謀ふ仕ることも。苟且なぐら四来從

氏家稙葉侑秀吉の
奇計を受て洲股の
城を奪ふ

柴守宰さる洲股ゆうと。客易ふ接こと難くべし。と稚藤の氣見と伊藤も。
難然とうち笑ひ。四年已来守宰めし。城が別さふ所の客ごと。攻壁し得ぬ
向。五年十年と来りその後。いかでら落しのふさるべきぞ。武士の意地として。
落さんとおもふ洲股と。落さで徒ふくれと来んや。軍い来ふ信せさるべくと。
夜殿と決定す。日根此牧村と後陣としてまづ兵糧と契しる。亟の月路
もどる洲股城へ推進う。左の魁軍い稲葉伊藤也。右の魁軍い氏家
常陸介。近くと進るやいなや。鳥流うち鬼岡声を作り。只一揉ふ責蕩
さんど喚叫で歩こうう。城中ふい行中半を湯。こ百余張ふて防げども思
ものざる事あるふや。有滝とそ見へさると。稲葉氏家の軍兵们。講ふ跳へ城
ふ拒着。虚陳ふらせどそ来迎と。牧村が勢こと也て。継て投らんと涸まども。
こ人衆の兵士ふ遮らき。見ん物してそ勒へる。左右ふ稲葉氏家の魁軍迷

城中ふ雑へて。諸當懸と推こくく。こと。敵途と立り見る。日根野兄弟へ後
陳とし山中ふ勒へ。居ゆら待い心のとふ。勢と頼ちて助りんと。茅どさし
的う。弥次右衛門五百余張洲股とく進んさりしが。時と城中と瞻伝。已遠
城と案ひしと見へ。ところぐふそる。稲葉氏家の旗号つきこう。弥次
右衛門こと。視く。半ば惰き半ば悦び。城中ふ入て軍と賀そ。廻ひど不秀吉い
大將と共ふ瑞龍寺山の林樹ふ。ありそ。洲股の体と窺さるに。事ゆ成りぬと告
ゆうしこ時分へ。と半成ふ。鬨ふ。時号の旗と吐発とひとく。遠林形叢ふ埋伏
ものる。尾刑勢の八千余張ふ。隆奉こる兵濃侍士六千有餘そのうふ。洲股
をの地下人们。を勢都合一万四五千。八方より蜂起。洲股勢のう散そ。
離きたるれふ固めるる。山下街口の隊伍まどろく。多流火義と射薙うち。薙
鑿ふせんと攻起るに。見ひらざる事ゆ。とを拒抗ふ方術と。見ひ一支も

女(おなご)ども。退去備をるその家へ吁怖しや四方八面山々谷々野も浦も岡の声充満して。年旧のむかしハ正年の如くこと勢衆千万余騎中央四人も居さきぬをうかゝふて國中すゝ地も織田勢の。桃声せぬ所もなきハ一騎当九小退入て。後の事ゝと慌忙き。城小投らんとする所也。此ゝ彼と理伏せし。織田勢一時小討て出。遂ゝ諸切て攻るにそ。疲ハきゝ寅の下刻ゝ他郡陣小維とも知ぬとそ。自軍と他軍と見惑ふまゝ敵と將佐と見違へて。敵ゝ軍も駿く。進退ゝに極つゝ。おのひくく小落失こゝ。備又日根野備中守ハ山中の陣小ゝてゝしゝ不意の寄合小驚き立ハうぐせしと。稲葉のうちふゝ人元より屬置こゝ。八百餘騎の兵軍もこゝ落失て。方位ハ二ゝ千人小過ぎゝるゝ。山中の陣ゝ引掃ひ城中へ入て防がんと稲葉小山へ近さんとする。諸前小突と関者と依て。ゝの方の林中ゝ。池田信ゝ帝。坂井右近。ゝ千余騎小て突出ゝ。厳弟大事の敵ゝと思ふ間もなふ右の方より。森ゝ左衛門。前田孫四郎。ゝ千余騎ゝて突ゝ。續て佐ゝ内藏助小田出羽守ゝ千餘騎。その外當國の侍士依。ゝの信長へ降ゝし小や日来見馴ゝ。猛攻囲。麥梅神信福ゝ巳の諸馬乗ゝ押ゝ。その勢おゝゝ一万四五千。猛火の燃る勢ゝして日根野一將ゝ當敵ゝ。ゝ二ゝ。ゝ小攻進ゝ。面ゝ向ゝ。ゝ朝ゝ。ゝへ稲葉ゝ。大澤治帝ゝ重時。五千余騎小て出。別張城ゝ稲葉山の間小隊伍ゝ。ゝ人元ゝ隊小屬せし。牧村斗之助日根野ゝ次右衛。ゝ遁ゝ火急小。救ふ方便ゝ失ふゝ。備織田勢い瑞龍寺の山ゝ小陣どりまゝ。本下秀吉ハ山下小ゝて不ぐの民家小放火。種ゝ小方御ゝ構ゝ。備中守も幸ゝ。漸く城門へひき入ゝ。ゝ。歌ゝ本下ゝ。ゝ士輩ふこゝ人元の軍ゝ。自

織田勢濃州ゟ
充滿しゝ
日根野
牧村倅を
駿うし

軍のうちへ混じまぎれ山路の案内とこまらかさを遂かを兵糧とこゑんこを〜。庫の
構かを推進て奉行人と斬捨〜。兵粮殘らを奈ふこう。且又牧村斗之助日根
野孫次左衛門の麾下の大將ハ稲葉山の煙と視て。引返んと途中大深谷かを
遠ら〜を。死力と出〜て斬接く〜。是後僅十騎ばかり。散々かを乗りて通ま生。稲
葉山の城内へ退揚ること人衆も。今い別段かを用ひしとて。静かを別
段の様と出。瑞龍寺山の織田勢へ一段加まりこう信長大かを悦び
玉ひ。まづこ人と近く召ま屡賞ひ玉せらましこ。二將ともかを詞とそろへ
遠遣のさこらさども。全く俺倚ガ功かをあらまを。君ハ言運本下の智謀を
小當まるを〜ハ。ハて。唯このこ人ハ只管小攻口の一隊と。ゆるさを九多へと望むかを信長。
先ん然バ城責の分隊とをさんと隊伍の次第と定めこ多ハ軍の吉例ゆまとバ
とて。一番ハ柴田權六勝家。二番ハ稲葉安藤氏家。三番ハ池田勝三郎
森三左衛門。四番ハ坂井右近尉田孫四郎。五番かを佐〜内義助。林藤八郎。六番
ハ中條小市。名古屋弥五郎。七番かハ村井長門守。林佐渡守。八番かハ蒲田
右近。九番かを青山与三右衛門。十番かを大溝次郎左衛門。本下藤吉郎秀吉ゆ。
彩のごとく十隊かを龍蛇と像て備とそて。稲葉山の本城と攻落さんと
畸禁る。此時稲葉山の城中かを大將右兵衛尉斎藤奥。彩あらんとハ
思ひも寄らざ。先日こ人衆の勇めかをそ。城中の兵と東西南北へ頻く防禦か
と固くしつまバ。今い御氣煩をと心續そを士と籠め置盤糧籠城をしる
所へ今朝より敵兵進来り。山の東後と推提園と。号統の音。笛の声。山海
も崩ゆを計かを所へて。怖〜ともまこさを〜ゆまバ。彩ハ斗もいろゆるまや
らんと。新く悔無ることを遂へ日根野兄弟牧村俗。北く城中へ急迫う。慌忙く
君臣と競ゆ宥めて謂ゆる。敵大軍かを推進ることども。遠城堅固かを進へ。

容易く落城をへうらぶ。そもそも此境ハ磯守氏士を。忠義後石の係く
中て。一騎當千ハ勇士なれバ必死とおもて防ぐんハ一月二月ハ軍城をぶ。
然るうち少ハ敗軍の自無もおひく壹集らん又江列の浅井長政の長政
母近江御方ハ秘奥の室家なるよし浅井記ハ
を君と親しれ所縁者なれバ同捨ハいなぶうらぶ。
とくうち少ハ擬ぶをべ。左右日を待うのあらば尾列勝も總屈して必定
家とせまをべ。とうつ小能奥が心を軍じ。日根野兄弟牧村長井ハ二九
ハ思て防所ハせだやと自ぶを率ひて構へう。時ハ織田家の先陣なる
柴田權六勝家一千余騎中て攻登をべ。續て藤吉郎人氏を勝ぶ
千有余人次第〳〵ハ登来方僅ぞ落城と見へうる
木下藤吉郎秀吉親子尾張播磨　屬警援城中
窮鼠ハ猫を噛。とハ蔡蜀ハ防禦の不仁。修羅軍。天数ハ烈まさ

まて。後圍山ハ逃るハ如く。大石大木落の後迫へつるべ墜せバ不得の柴田も
をもうがさし。二人氏交代て。彼行の如く寄登をる。城中より鉄砲五百
器を放ち幕を射亀隙際あらぶ防禦ハ〳〵きバ夏二般死人おわく
して。進ぶをとしもをを得ぶこと書四番入をて。攻まどく城中ハ。
弱るを色をとしも見へ進ぶをとのを接ふうう。右左ハ日暮暮られバ。
後軍をるも詮ぶをとて。心ならねど尾列勝。樣の陣へ退迫せ。城の兵士
もこまこと退をぶ。又翌日も登鉄ぶう。軍弱ぶハ打ども寄ども名ハ負ハ
要塞の城ハをバ更ハ強できけ〳〵紀もをて。其日も徒ハ退きをう。織田殿
柴ハ相遠〳〵を。吁甲斐ぞなき自軍の攻陥ぶ。平ぶ向ふて攻落さん。
とを陣を城ハ樣へ稲〳〵自分ハり立烈火の如く。指揮〳〵ぶ。城中
ハ矢石千ハ降ハ貯へをバを甲斐なして。ハ當日もむをしく軍を返〳〵

う。遠嶋秀吉御前に小出一文演を守る時、万卒當りがたしと言
てびこ日の如くにして力攻に責さるゝに、士卒を換ずる暇多く、勝利の
程も覚束なし。毎に軍士を労せんより、如く攻落と雨げたかひ。紙
よく勝利の図を計り。然して攻入至るべんべ勿を急ぶに當城を
と言はるゝに信長も。智者の本下がうふを初て謂あべしと思れ
しべきれるも攻口を是れ出ひ。諸軍を休息せしめて后信長伺とかな
がしけん。竹中重治と呼よせ多ひ。是下に當國の住人ぶして。久しく遠城に
出入つるべ。城の案内よく知つらん。いろゝの方術を設るべ遠城を陥るべ
きぞ。立ましのおらば教へらるべと命せ。重治然て後。龍興籠城の術あを
べ。織田家に攻撃の謀あり。双方の手遍反に切張のうへの事なるべ。一應熟
忽めて簡と言状をる様なりがしと答ふるを織田敵ようふも不快のうへ

なりしが其下竹中が意中を悟り。重治を閑所に請し。親を巧に言ましを。
元来當城を国む事は龍興の先祖通を滅ぼ民の塗炭に困しむを。
救ふんこの本意なり。頼て足下と約束せし。龍興の余積あらば
家臣相續の事せ先てに二九と取て后。扱を言んと存ずるを。誘引入
べきを暗像。いさゝか不審の和候帰くに其大意指令を〔と親るを〕重治
黙止に道をして長良の閑道を教へ〔ふ〕。稲葉山の西麓の方に長良川あり遠流上に一条の想流あり其川の岩ひしを下といふ 其下
こを聞て所ろも恩余を謝して大に歓び急ぎ我陣に帰り浅野弥兵
と情に拒れ。明日を遠城に一番張を為べき。當陣の事は一部
秀長に任せべし。海ろ〳〵く渠を補佐して。諸士に時号を通ぜ〳〵。意
の随に撫治を称潔。當城中に籠投べ遠城とりて笑に結着時号の
籠ふらべきを。そを以人次第を見ふに攻投べしと謀合せ。後本陣

小紙にて。大将の御耳近くさし俯て。密事あらくを言はゝ。そりゝ身と
敵にして。猶豫なる自軍の勇士輝次卿小六。全又十郎。加藤田隼人。稲田大炊助。
青山小助。日比野六郎兵衛の六人を自身と加て。俄に七騎煉出を撰て。
屬山中渕間の準備出。渓の晴号の事あるを。一斉あまりに聞ふ。一往
甄小酒を盛。こゝを背負て身軽小騎足。八月十三日の申の刻より長良乃
渓へ駆きり。又秀長と淺野とが本陣の陣不を固く守る。屋敷上と臨江
て晴号の甄の出る様を。いまやくと待ぞ。秀吉は
長良の渡を徑小渡て。測出く行程小果して。瑞龍寺の峯づゝに。彼山
小渕らん城の東小背門の色あらんと思ふ地方小出こゝも。演渡あき事
言づふ。此頃と越んと欲する小。多の翼と得ぞん小。彼岸へ下
らんと欲する小。猶の紙をんが得ぞ。如何せんと逡巡小。彼と思と視合を

の。悶まて憂時停を。奇御の不思議を得こゝし本下。相小渕を嚴小つ
こひ。弱索とさけて様子小換東西小幸況おもひして。漸く一隊東をこゝ
の兵小撃奪り。遠ゆて小刻息次なやと。腰より芸糧をこゝ出。背負て瓢を
こも小郷しの或い食し。或い飲。係使慰ふて立る。機会しも京い十二日の
早家みまぶ月光さ出ふして。畫の如く。笹の隈く樹に猶こ兎羅まを仔細小見て
遠小かゝ。お記家名やと。個く奥と備を而小。藩間演劇小
謎しく。山を馳と所へ七騎偽小身と聲。同と聲で偽色ある品と背
擔小親徹ゝこと張へ。憤をどある猪の竈若とりんて異出。本に根岩角を
小位を刻例し。実崩し。猶り怒て狂ひ来る。沿小續て一個の壮士遂ゝんと。
人大曷一声。叫んで猪を呼返ゝこと。りんるより七騎。食不審ゝまゝ。
徳る源山小猪遁ふい実小尋常に糧者をらじいふもの細あるのを

秀吉
肱股の
勇士と
率て長良越の
嶮崖を躋る

らんと。頭上の岩を攀登り。人と獣と覗守をるに。彼壮士の面相の像く。
凄くする悪石と事ともせず。跳越く〻蒐集る。猪いこまふまちく怒り。
牙を磨し。蹄を濺。彼壮士を跳蒐る。形虚空と身を翻し。四五尺宛
〻壹過し。虚空を窺ひ猪が脊を。飄然と乗ると。猪はまくと見て勢ひさん。
と大樹岩石を躍を歩著。右横左横を走る。蜂須賀又十郎見て慌へ
ろね。猛る猪を撞止て。彼壮士を助けでやと。のふを本ト割し止渠い定て
凡そ力を試ものとおぼへくるで。見俺が大事を抱て身をるの。
と。と詠さで猪も獣と人の遠果ひ永と片津を含。あやと看る間を彼壮
士右手を野刀接提め。身をもづませて猪が脳を馬報と撥徹し。力を信せ
て刺るやど。當猛の獣も窮而を怒る。間呼んで手傷を。天腹地背を
例きこう。然る方僕まで傑を。彼壮士も共を例き息絶しをや

起るもおぐらまで。本ト こまをとりんるとうも。競しくて起挙り。彼壮士がこも挙動。
實凡人とおりをんまでど。怯勇士を獣と共を。驚しむることの石便さとそど
き傷てとく。蹴まで事をの猪を刺止つまども。たゞを尾束を棲と拾る。
をみちもやらで。岡絶せり。蜂須賀。稲田こまをとりて。助起さんとまでまで。腕
をみまでど。こまで獣を逃さじりのと。一徹を拾報るを。渾身の膂力腕を
凝若し。放をぬのと見へ。ふるまでば本ト教てゆりるを。彩まで。凝固し。
拳で。方を。ひ紀放さで。指打皮肉爛をみどして。後の患を。紀出さんを拾り
し尾束を。侵切取。如く息を休まち。腕を温めつゝさで。心律ありてをのぐち。
五指の筋膏延縮。離さゝのでと教を。稲田力を接て尾束を截る。後吉帝
へ欣殘せし。孰の酒を口を賤ぎ。帛をりて。腕を草で。種〻久拾ををまを。
澎く息を士目を眈く。遠响本ト〻も倚てをみいるる。車をまで。京津も獣を

秀吉主従
猪葉山の
脊路を
出るの
中途

偶然
堀尾
茂助が
怪勇を
視る

其二

なぞや一人。徒に深山に分入て。尭き石作をなしつるぞ。勇力骨法實に惜し。
乱まさる世に出なバ。大国をも抔の身ともなるべきに。血氣の勇に誇る律。思慮
なき無学のなぶ者ならバ。郡の宮に彼壮士荒木と笑ふ。魂きなき御不審
ハ理なれバ。柚家が身より是ハ違こそ。何国何姓なる人にして遠山中へいり
来るぞ卉も遠き後山獄谷ハ。柚家の常の住居なり。又遠こ石作を活計とせ
なまバ血氣の勇に誇るにあらぬぞ。今日昨日も又一昨日も。尭き石作りて當日く
を過せとあり。原柚家の性にもあらねど。聊不全の所ある由へ。力を自試し筋
骨を練固んとおもふによりて。山東奈隣逸地に棲。猛獣に出逢ふバ刎止る
にや嘘てにや廠をもて遷を試んと。心の不轍今ぞなや。満足なくき猛と共ふて獣
ハ左右なく刎止ばども。勇氣百倍して息絶し。亜恥しの挙止やと譚語ちに
小猴の筋よりにや〱総まて。擢りる。猪の尾を提擬せ。壮士おもひふらち喜び。

單ごし帛を解退て。指を動し試るに。掌中紛になりつるのをにぞ。些も過失あら
ざる由へ。盃推拭ふて七士に儀ひまぞく。介抱の恩を謝し。其ごしく辞退その嘴
本に落び詔らく。如此深山中にて。端なく壮士に値偶こと。必定宿世の
奇縁なるべし。然ば智合人てハ一方ならず思ひもし。又思ふまともむべなり。
全もる中の心中に鎮ひをこめて所望し百ハ宮主に従ひて身を立んと所願
なしつるものなくらん。唯よく其意を識てまバ。意中を隠さで語らましよ。彼のふ
唯ハ清洲の侍士木下秀吉なりふ者なり。子ハ往日岩倉にて織田家に仕合し
ならぬ攪し織田勢の目を驚せし仁なりふむ。俺們今宵推参を穿ち遠
處まで来りしハ。此城の背門へ警控んがためなるぞ。子ち身せんとならバ今宵
まれなりも功前せよ。宜く推挙なすべきなり。と詔を熱く聽くのち。備ハ織田殿の
御内なる木下大人とて。渕股城を一夜に築し人なり。と聞借の風説に聴つる

が臣下ゝなれし玉ぶりをいふも我が御推知のごとく。岩倉の仁をもて推知ゝ
さべ清洌殿ゝも知るゝゝめさまん。然るときゝ弥織田殿ゝ仕へ奉らせ由緒も
あまど御ものうる所あるゝ。織田家ゝ奉公ゝるゝゝ。そ縁故として詳ゝ事
さべゝゝてゝ父忠右衛門。嘗て武田家ゝ仕へ奉りしを岩倉の城を伊勢ゝ殿ゝ出さま
て滅ゝらるゝ。不便と加へゝるゝゝゝ。然るゝ恩を伊勢守殿。武義守ゝ一身
なるゝ。清洌と謀てまゝらせゝゝ事露顕して武列殿ゝ織田殿ゝ代を乗ゝ
ゝども勝列公ゝ仕へ奉りて。弥清洌とゝ共ゝ親しく。岩倉城ゝ滝守まゝ
ゝ。計らずも恩と思ひ多ひ世と果ゝゝゝゝども家宰の人々遺言と守り。
岩倉ゝ義城せゝゝど。終ゝ織田殿ゝ攻隠さを。諸士退散の群ゝ入て。插家
親ゝも零落ゝ。遠国の知己と情を。洛畑の内ゝ暮ゝらゝも勝列殿
の恩義と懐ひ。父ゝ武道の意地貫ゝて。二君ゝ仕ゝ刃とゝゝ。後世責

小牙と任せて。一両年と経ゝゝ小父忠右衛門も相果てゝ名を塙尾義助と
草め今ゝ自孤の小ゝゝ。ゝゝゝの若ゝ従ふとも心の隨とゝりふゝゝ父舌
主の敵ゝる。信長公ゝ仕へんことゝ義ゝ小月くゝ。京ゝ上ゝ然ども今宵ゝ抱
の恩ゝ報ひまゝらせんさめ。此ゝり城の閑道と道きゝゝしりふゝゝゝゝと謂ゝ
本下義出を感じ。再び奉公の儀ゝ動めゝ。案内と伺ゝ憑むゝと。望ゝ
義助ゝこゝ多り。此ゝり城ゝ背門ゝゝゝゝ一信演ゝき徑ゝまゝども御心寧く
おゝしめせ。彩善通ゝ別ゝる吾倣ゝ出ん。ゝゝ。ゝゝんと。弟婦ゝゝ
起騰ゝゝ七ゝゝゝ彩毋ゝく。涙ゝ續くを本下指揮して時刻若干流を
しゝゝ急ゝゝゝとゝゝ伺ゝ蜂須賀親子青山稲田。義助ゝ攀ゝ
流ゝ。樹の根岩身義の夢。験ゝ並びのき郡ゝゝまゝども安ゝ内ゝ懇さ
る義助ゝ。七ゝ狂捷の達人ゝゝ。涙絶酔ゝ殊ともせず二時ゝ

木下の勇士等
大樹を梁らし
稻葉山城中へ
襲投

うて過る間小絶頂小こて登りまし。此岑より城中を視卸せば。宛堂小把る如し。水下よりく覗ひ視る小背後ハ要崖を憑小して。守る兵士も更小えを。恁てハいよく意寧しと惟を當へで走下る小。遠道傍ハ雖不もをく此く剣下行少で。程近りまで遁小號を。聽城際まで暑さりる。遠小て須刻休息臣。城中の遶溪を窺ふ小後を小柵を結達し。を程小ハ厳を構へ。あこ人の雑兵ゲ火を焚餘して。俄聞居さり。水下こまを得と沈覘し。青山小助と車で謂ゆ此所ハ足下の能きる所ぞ。潜へて斬こせよと小語告るを小助ハ諾受て隈を伝ふて忍入らんと。構上を得と覗巡を小柵もを為ぞ疎小繰く。外を回西まる溝ありて。流ゆく水も淦くと。底明小見ゆるども。絶崖高く聳て。所無小をべ此所みるまでひろふ。傚ぞやと溝越う。ぬるを岐助後より声をとけ。搦を渡して。をからをべしと謂ゆ。傍を小を植る松の大木小双を。をとけ。引掴とをる小蹄

須賀加治田力を攀て一揺二揺左右をくこまを推倒し。を後溝へ歩勉まべ。所もるわさぞ一條の獨木橋をぞ成得さる。青山小助うち喜び。童汐ぞ人とをまを傳ひ直小柵を乗越て羅ゆ城中小潜び入乗隈西隈を廻視て。まべ兵糧を炊ぐ所小到まべ。所ハ人を要を過さりを。十人ぞりを雑兵们。所悪ども。ら。を熟睡して。性弾ゆ兵隻。那英。宮山を厳の内へ搦り。飯笹採て掻おーあけ。着べりをだをるをど。把うち混ぜて飯ハ残をり。得さりと抱へて自持也小柵の側まぞりち来り。一弾掴を揺くを見さりを。水下を後へ。る大樹を一奇滅を。柵を乗越て内小投小助ゲ棄ひ。仮寝を。八士八人方小うち困を憚さ色ゆく。契ーて。怒て水下言ふを。者ども者へ通ゆ遠城を。発を得さりし須ハ遠所小も成乗を備ーと見へて。衛厳剣厳の礎ゆをまべ要崖小も特小心せり。僅道ゆこの規則を守らべ此所小も守兵ゆ四五百人隊列を

こゝて構へるあらん。然ればこゝ我々ふたりして。諸侯とゝ得ぐらんぞ呼ぶ者の運の強盛や。遠作ゆゑ面関まで行とも意寧ろ〻べし。先く怪備せやとて。頼と往奥さうし。秋孫方の徒福ゆゑ操出し。八人一奇と思て彼稲葉山の雑兵糧ゝ〻ぶ作とゆし。兵糧厨より飯槌持出。ゝ石厳の外面小積ぶる。紫ゝ小影の正心へ火薬とあまゝ燈撰量よ紀時分小燃出べきやノ十四五間面小仕ゝて。追ゝの方へ走りぬ

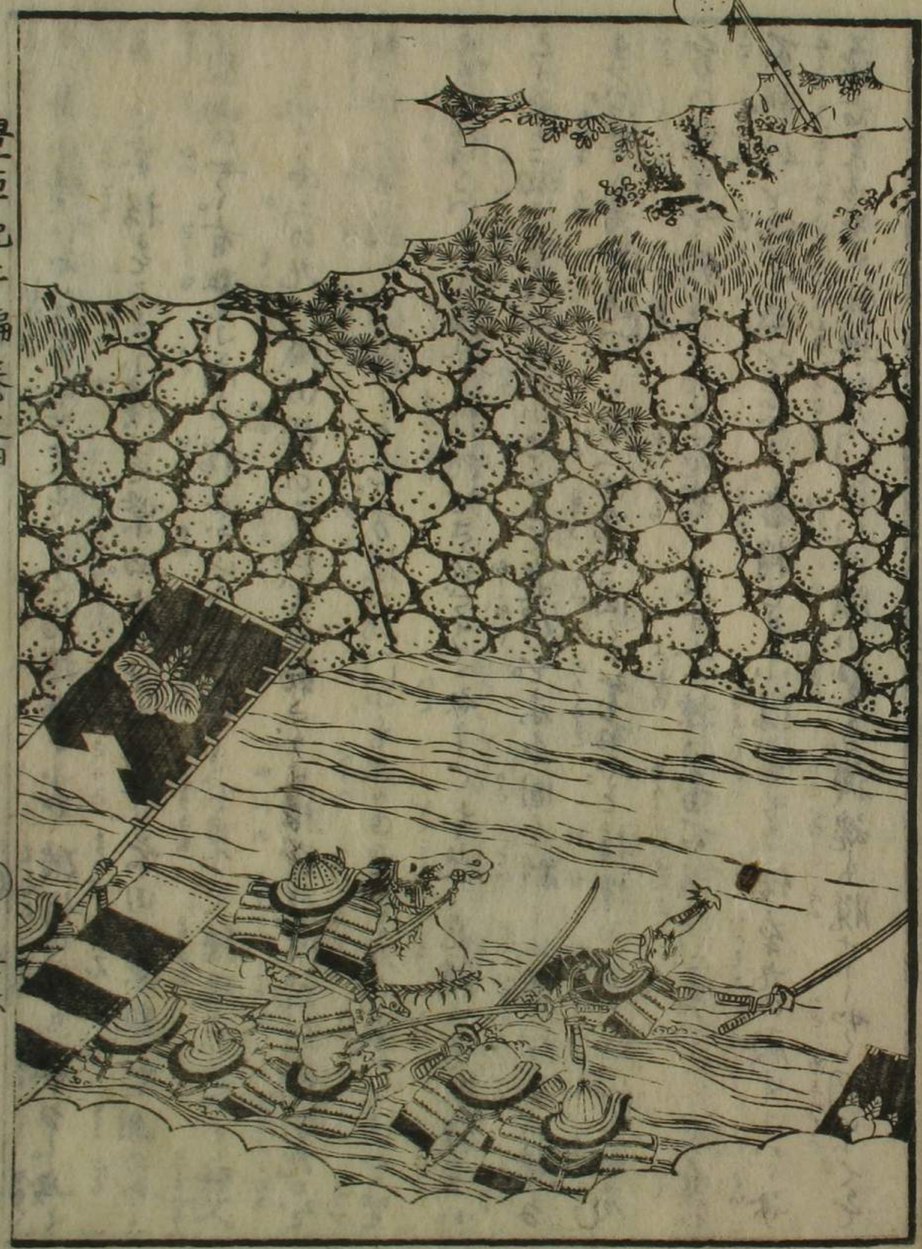
本下八士焼兵糧砦溝門属激戦二九

千丈の堤ぐも蟻の孔より崩ゝと。信しらぬやう小所しゆ方僕背へいう鑿投ゝる。將ゝぶ八人ゆゑども。本下が智恵忽意ゝ。史ともゆり水ともゆり数万の兵士が賞罰ふゝて能ゝる遠城と。夜嘯るひまふ顕さんとゝ古振ちゝて。ぞゝゆり。然れど小塔尾義助ハ徒の外まで案内せんと本下小紹出せしゝる。

逆誘引て柵を。まゝ〻ゝりゝそ城中小潜没ゝや面関小ぞ向ふゝり義助人ゆき不ゝと行て。七人の者と呼ゆけて。仇抱と受一報恩小。城の外まで案内せんと。先小紹来ゝるゝ兵糧と飽まで喫し。腹徳ゝるゝを恐小報ゝんゝめの所作ゝうし。こゝまでぞゝつ小仕ゝる道ぞとうも戯船を本下所て。一粒万倍ゝゝていふゝるゝ。分ゝゝゝい等閑の撥ふゝて偏ゝふまじ。彩骨碎ゆゝぜんバ市らじと笑ゝこゝて行ける程小。很而ゝゝ〻ゝを雑ゆふゝ〻ぬけ。二の九面関小到ゝ視ゝべ諸將の守ち口隙く伍く有係小備構ハゆゝ。位今軍を止ゝべ將卒心ゆるゝや。善悪も知らぞうち所しゝる。池邸の蹴遠ゝゝ流視し。面関の門と家ふに鬼候固く閉ゝゝべ論ゆゝして用ゝゝし。斗たの方と視て。面清の水と慢害る。最高ゝゝる溝門あり。此ハ兵戸と壓せしゝ小ふて。候ふも痩ゆも用ゆゝべ。此門より攻投ゆハ心寧しと思決ゆゝ。迷小嘲号ゝて。自軍の軍と招ゝんぞ

と例の鬼と笑ひ結着。據より高く鑓揚らう。独りて木下七左ヱ指揮ふ。
今こそ雄氣を用ゆる胸なき遠溝門の戸を開よとのふに心得輝次賀久子。
稲田喜ゑ山城尾の人々。水中ヨリ逃入々々。各壁戸ヲ双手と槌肩りと横ヒ
揚揺あげ。七人一齋の金剛力ヲ離ゐ溝戸と刎紀寄ゑう。独ども西ゑと守ゑ
ゑる。制止の名士勝ゑう。這八人の個くと自軍の雑ゑと懐ひをしくべ。水口の戸と
開るまでも更ヲ心の點ざりレヲ。遠奉止と視るゑうも。ぎハ惜き半ハ腰しこ。紀九
溝戸とひ紀開しで。孰仁の大將の指揮ゐてあるゑるも腰し紀奉動や謀
殺人の事ぎゑうゑん。撃揮て敵ゑ奈せんと第ゑめ紀蒐る機会ゑうゑ。山上
なちまち爆々と。卿ゑくやの奈黒煙。天と焦して震撼まべ奉九ゑるひ
慌忙き奥ゑんで噪起ヲ。二の九ヲ備伍し諸將達動りゐも取移で。山上
當と弛ゑる。遠強動ゐ木下ヲ。名禮一厳ゑる紫嶽ゑ。ゑうけし火業の燃起ゑる

機会ゑ。「目ゑ」ヲ山焦の光破天と刎ゐ火発。瞬際ヲ焼競ゑで。構達し
制解ゑ公解ゑ。絶一時ヲ燃ゑう。奈ゑ奉九ヲゑうもびきて火挨上殺ヲ落ゑうと。
防ゑんとゑるに水激く。火勢ひゑく燃ゑる。女性幼稚ハ逃ヲ惑ひ泣ゑ
声の木魅ヲ响紀。ひそ外の強動ゑう。是ゑめヲ溝門の怪し紀事ゑも余ゑヲ
音ゑ東西ヲ散南北ヲ乱ゑ。蹄殺ゑで怪ゑる石八面刻の外面。木下
の自勢八百人全ゑ。なうヲゑ。ゑ小一斉ヲ秀長正勝ヲ進で地響ゑう。鳴号の動と
視るゑうゑ。一歌ハ樹ゑの個ゑヲカと勢せよとのふと一斉。指と叩ひて無ゑと
まべ輝次賀久子ヲ正勝。溝門の水戸と寡出。自軍と招ゑヲ各意得ゑと者ゑ
溝とうち越。正魁ヲ進ゑし力士軍。揺槌ゑうち揮溝門ゑら。面刻の城戸と攻ゑり。
喚叫で孔投。城中の兵軍ハみゑで結火ヲ家ゑもこゑと遠ゑんのゑも
ゑく。兵本九ハひ紀退ゑ。大洋次帝ゑ黒ゑと目ゑて。ゑハ遠揺ハ破ゑゑる。



彗須賀堀尾
稻葉山の水門を
開て西方の水下
勢を導入る

小一郎小隼けや兵衛。進んとすゝめと指揮をなす。破竹の勢き。雷声して突撃をこゝに小隼。柴田。森。池田。坂井。前田の軍勢。怒潮の如く暴雨の如く。有繋小関き稲葉山も崩隕べき而已。陳際あらせず競入しくべきを二の丸い織田勢の交代を動こう日根野兄弟牧村係。本丸口を斷切て。翌朝小防戰しくるゞ。方僅い此門ふも止る。疲本丸ふ退入て内を堅き小隼るべしと長井牧村とさゝぐゝ。孫しく本丸へ退陣をこゝを進兵いこゝぞと二加を拳ひつけ入ふせんとて進行を。本丸固く制し止軍ハ不分の勝を。まゝべ。退く者を追べくらゞ二の丸を固く。系兵衛と指揮ふ者く心沿て。孫兵衛方の殘兵を。雜兵まで也逐散し。五十余棟の番所仮所。ことごく棄ひ放。凱歌を作て威をあゝし。各將こゝ休息せり。備本丸の厳中ふ。孫兵衛右兵衛兄弟兵衛與背門の火計燃ふ。猶魂も脱せしかく。惘果てゝ見へ。ひねの日根野兄弟長井牧村。こゝ事ふ本丸へ来るを看て。蘇生もとる心地しの。所安逸なしつゝ。背門の火勢のよく烈しくこゝを。結ん御も。剥進軍ハ二の丸を。孔入くこゝ。脱ふ隊伍。著しく動へり。且搦手の兵糧一撒ハ全く焼失せしかり。後ハ兵ぬまゞ當至て。奴隊の粥を啜ぐべく。準備もこゝふ失ふこゝ。雑説言んふ詞をし。家を本丸遠向ふ。怨ゝ。攻こゝらん。ふハ忍義城をべりしと。禍て行中重治と弱せし。詞のあるを。本陣へ奏復しふこゝ。

繪本豊臣勲功記二編巻之四 終